



目次

序章 忘れられない子どもたち

5

第一章

子どもにうそをつかないで下さい

15

誠実な先生

うそつきは泥棒のはじまり

先生の権力を振りかざす

先生がうそをつくとき

職員会議の議論を大切に

第二章

貧しい子どもを大切にして下さい

25

父母の貧しさを引き継ぐ

少年の死

願いは同じ

貧しさのライフサイクル

いつからこうなったか

競争の性格の変化

貧しい子どもの学力

義務教育終了直前に荒れる

### 第三章

学校の能力主義と管理主義から目をそらさないで下さい

評価ということ

ランクに分けて成績をつける

先生の評価で値打ちを決める子どもたち

学校に適応できにくい子ども

過剰に適応する子どもたち

丸坊主と白いソックス

### 第四章

授業が好きな先生はすてきです

授業に生きる

子どもが学ぶということ

私の小さな工夫

『ヒロシマ神話』の授業から

カトリック養護施設に手紙を出した少女

母親への共感と反発

## 第五章

子どもたちがみんなが楽しめる授業を始めましょう

53

授業づくりでいやだったこと

『銀河鉄道の夜』から始まった

子どもたちが発見したこと

賢治はふとんをかぶつておいおいと泣いた

私のまとめの授業

異質協同の知的活動を目指して

## 第六章

子どもたちに語っていますか

75

語ることは大切です

班で歩くことの意味——遠足

当たり前を超えるということ

「私の幸せのために」から「私たちの幸せのために」

おばあちゃんの誇れる女の子になるから

希望を語っていますか

序章

忘れられない子どもたち



私が先生という仕事について語るとき、いつも頭を離れることのない中学生のことを書いておきたいと思います。わたしの原点の一つであると思うからです。

私が新採用の先生として赴任したのは、清流のほとり扇状地の町の中学校でした。自然に恵まれ、子どもたちも穏やかで屈託なく、先輩の先生たちからも親切にしてください、この上もない好条件です。スタートしました。私は週二十五時間の授業に精一杯で、辛うじてバスケットボールの部活の時間に子どもたちとの楽しい時間を過ごしました。

新採の私には長かった一学期がようやく終わろうとしていたある日、私は子どもたちに、「一学期の反省」というような題で小さな作文を書いてもらいました。その時私が考えていたのは、子どもたちが自分の国語の受け方を振り返って反省するということでした。そして、どの生徒もそのように考えて、「二学期はもう少しはじめにとりくみたいと思います。」と結ぶような作文を出したのです。

ところが一人だけ、野球部のエースのM君は全く違っていました。彼はクラスの中にいるある男の子の名前を挙げていました。

「先生はこの一学期この子に授業の中で声を出させていません。この子もいっしょに勉強できるように努力してほしいと思います。」

そのように書いていたのです。

私は本当に驚きました。そしてうろたえました。そのクラスには確かに学校に来ると口が利けなくなる男の子がいました。場面緘黙というのでしょうか。いつもここにこと人なつこい笑顔でいますし、小さな体ではありましたが、特に他の子どもたちからいじめられている様子もありませんでした。私もその子の存在はよく知っていましたし、自分なりにその子を注意してみているつもりではあったのです。

しかし、私がどうしてその子がいじめられたりしないのかということには気付きもせず、周りの子どもたちの思いや願いにも気付いていなかったことを、はつき

りとM君によつて教えられたのでした。そして一日一日をただ適当にすまして来たということを知つたのでした。

私は次の日、作文の後ろに、

「二学期からは努力することを約束する。」

と書いて渡しました。

実際に二学期から私はこのクラスの男の子に接近していきました。登下校に声を掛けたり、掃除の時間にそばによつて話しかけました。授業のときには、その子にも読めそうなくらいを読んでくださいと指名しました。一定の時間他の子どもに待つてもらひました。今思えば何の方法論もない努力を二・三学期続けたのでした。緘黙というものについて学習すらしていない若い先生のひとりよがりの努力は、この子にとつてどんなに迷惑なことだったでしょう。M君への答えにもなつていなかったのだと反省もしているのです。

7 その三月、この問題に何の答えも見出せないまま

に、私はいきなり転任の辞令を受けました。新任でたった一年ということに無念の思いを引きずつたまま新しい中学校に赴任しました。幸いこの学校の先生方も温かく前向きな職場集団を形成しており、ここで私は本当の先生の修行をさせていただきました。

ともかくここで最初の学級担任をさせてもらったのでした。一年生でした。

入学式の日、突然小学校の校長先生が私を訪ねてくださり、

「J子さんという子があなたの学級に入っているのだが、小学校六年間一度も口を利用してくれたことがない子なのです。よろしくお願いします。」

ということ、私に彼女の様子を細々と話していかれました。

こうして、私とJ子さんの三年間が始まるのですが、わたしは先ず二つのことを考えました。それは、口を利かないJ子さんとのようにして思いを伝え合うかということ、彼女がもしいじめられているな

らばどのようなにして彼女を守るのかということでした。

先輩のアドバイスもあって、私はこの子と交換ノートをすることにしました。私の交換ノート第一号でした。早速私は大学ノートを買ってはじめてのページに自己紹介を書き、

「きょう、がっこうでおもしろいなあとおもったことはありませんでしたか。もしあつたらせんせいにおしえてください。」

というようなことを書いて彼女に渡しました。

次の日彼女はそのノートを持ってきてくれましたが、ただ一行、

「ありません」

とだけ書かれていました。

「ありません」だけにしろ彼女は毎日かばんの中にノートを入れて持ってきました。それはわずかではありませんが、私に望を持たせてくれました。それにしても「ありません」はかなり長く続きました。

養護の先生が、

「ただの大学ノートだから書いてこないのじゃないの。」と言ってくれたので、私は綺麗な女の子の絵があるノートを買って交換ノートを続けました。それでも「ありません」が続いていました。

そうして六月を迎えたある日、彼女のおばあさんが亡くなされました。この人は彼女をとてもかわいがってくれたということを聞いていたので、

「J子ちゃんかなしいでしょう。せんせいも三ねんまえにおじいちゃんがしました。とてもかなしかったです。」

と書いてやりました。

すると次の日、出してきた彼女のノートには、

「このあいだおばあちゃんがしました。J子もかなしいです。」

と書いてあったのです。

こうしてJ子さんと私の本当の交換ノートが始まったのでした。

二学期、体育祭が終るとJ子さんに対する男子の一部のいじめが私の耳にも入ってきました。ある男子がいじめたと聞いたので、私はその子と話しをしました。彼はいじめたことを率直に認め、もうしないと約束してくれましたが、私は彼に知っていることを作文に書いてくれるように求めました。

〔小学校の〕二年生のとき、J子がものを言わないものだから、みんなが何か言わそうとして足でけつたり、本でたたいたりした。J子は泣いたが声も出さなかつた。四年のとき、やはり何かを言わそうとしてひどいことをした。それは男子だけでなく、女も一部の者はそういうことをした。J子がきたないとか、机にさわるとききたないとか言つてけいべつしたりした。ある時はJ子が帰るとき、女がいじめてJ子が足にけがをしてお母さんが学校に来た。五・六年のときは、J子はきたない、さわるとききたないといじめた。今でもきたない

9 ことごとくめる。」

私は思っていたより深刻であることに驚き、子どもたちに、作文の形で意見を寄せてくれるように頼みました。

「小学校に入学した時はしゃべっていたのだろうか。私は知らない。しかし言葉を人の前でしゃべらないから、彼女は男の子たちにもいつもいじめられていた。二年生の時は特にひどかった。けられたり殴られたり、でも彼女は決して泣かない。泣かないどころか、毎日学校へくるのだ。いじめられる学校へ。私たち女子は何度か男子たちにやめなさいと言った。だが言えば言うほど男子は彼女をいじめるのだつた。担任の先生が彼女に話すようにした。だが彼女はしゃべらない。どうにかして彼女に言葉をしゃべる楽しさを教えてあげたい。もしかして彼女は幼い頃のいじめられた悲しさから言葉が口に出せないのかもしれない。その責任は私たちにある。私にあるのだ。言葉を出すということの恐怖心を彼女から取りのぞきたい。」(女子)

「J子さんがいまだにしゃべらないのは、みんな小学一

年のときから僕のように思っついじめたからにちがいない。J子さんの行動を見て感じたことは、家の近くの子でなくとも女の子のやさしく面倒を見てくれる子となら話す。以上のことからJ子さんは小さい頃から男の子や女の子にいじめられてしゃべれなくなつたんだと思う。しかし今はこの組のOさんたちと少し話すようになった。だからみんなもつとやさしくしてやつて、いろいろ注意してやれば、もつとしゃべれるようになる。しゃべれば勉強も出来るようになると思ふ。」(男子)

このような作文が寄せられました。わかっている子どもたちもいたわけです。これに力を得た私は、学級委員・班長たちと話し合い、この寄せられた作文をもつとして学級会を開くことにしました。

学級会を開く直前、バレーボール部の一年生の女子二人から次のような手紙が来しました。二人はのち10にこのクラブのキャプテンと副キャプテンになる人で、

私はこのクラブの顧問、J子さんも部員でした。

「J子さんがバレー部に入っている頃は明るかった。(J子さんは体の具合で休部していました)私もJ子さんに話しかけた時、J子さんは話しをしてくれた。今は体が弱いためにバレー部に来ていけないけれど、もつとバレー部に入っていれば、J子さんとみんなの心がもつともつと大きくつながっていけるのにな。バレー部に入つてJ子さんは一人で家に帰っていた。それを見てみんなはJ子さんと心を結ぶためにいろいろ苦労した。Mさんに、J子さんがこの学級に来てみんながいじめると思うと聞かされたとき、私は考えた。この組のみんなは、先生がJ子さんの話をしているときでも何か他のことを話していた。これではこの組でもいじめられるかもしれない。もつと深く真剣にJ子さんのことを考えてほしい。」

「バレー部に入っていた時、あんなに明るかったJ子ちゃん。それは少しはUさんやGさん(近所で小さい頃からよく遊んだという女子)の力もありますが、クラ

スと同じかわりのない人間の集まったバレー部にあれだけ仲良くなれたのに、クラスでも必ず仲良くなれると思います。でも今のままではだめです。一人一人が持っている丁子ちゃんに対する考えをみんな言ったらどうでしょう。そのためにものすごい努力がいると思います。でも先生がんばってお願いします。」

その後も丁子さんが学校で話す姿を見ることは出来ませんでした。しかし、これらの声に後押しされ、学級委員たちの真剣な努力もあって学級での話し合いは進み、丁子さんをいじめる子どもはいなくなりました。

私は丁子さんに働きかけ、バレーボール部に復帰してもらいました。練習は出来ませんでした。いつもみんなの練習を見ていました。

丁子さんは軽度な知的障害があるということ、私の学級を交流学級として障害児学級に入ります。この時も学級の子どもたちは、それが丁子さんのためになるのかどうかということでおおもめにもめるので

すが、結局みんなの激励を受けて入級していきました。

二期の終わりごろに、丁子さんは新しく二冊の交換ノートを始めます。

一冊は、私の学級の委員をしていた女子が私と丁子さんのノートを知って、私も丁子さんと交換ノートを始めてよいかと私に言ってきたのでした。

「丁子さんに申し込んでごらん。」  
という私の言葉で、彼女は交換ノートを始めますが、これは中学校の卒業まで続いたと、後で彼女のお母さんから聞きしました。

もう一冊の交換ノートはバレー部の同級生たち八人の間で廻されていたものです。このノートのことは当初私は知りませんでした。二年生になった秋、ある先生が運動場の片隅にバレーボール部のものらしいノートが落ちていたと私に届けてくれたのです。

中を開くと、なんとその日私が大きな声でしかつ

たことを、Kという子がひどいといって怒っている文の後、J子さんが、

「私もそう思った。」

と同意しているのです。これは私が見てはいけないものだと、キャプテン（一年生の時手紙をくれた子ども）に渡してやりましたが、私の知らないところで仲間との生活を持っているJ子さんを知って本当にうれしかったことでした。

二年生になった時、児童相談所の専門の先生に来ていただいて個人検査をしていただきましたが、この先生は、

「この子はいわゆる場面緘黙というのとは違います。きつと話すことができるようになります。」

と教えて下さいました。

私は障害児学級の国語も担当していましたが、この学級にJ子さんより一級上の女の子がいました。明るい活発な子で、やはりバレーボールに入っていました<sup>12</sup>が、学級の中のおよきお姉さんとして下級生の面倒を

見てくれました。

J子さんの二年生の二学期の終わり頃のある日、私の目の前でその子と話をしています。それは私が初めてJ子さんの声を聞いた日になりました。この日から、ごく親しい人たちばかりの中でなら、私とも話しをすることが出来るようになったのです。

あの新採の学校で私に要求をしてきたM君の言葉に私がやっと応えることができたといえる日でした。

しかし、それから三十年、ばかな私は、その日が何月の何日であったのかを全く覚えていないのです。というよりも、そのことの意味さえ私が本当に知ったのは、先生という仕事を長く続けた後のことであつたと思います。

一人の人が成長するのに、こんなにもたくさんの方が関係しているのだということは今も本当に新鮮な驚きをもつて思い出すことが出来ます。私が語った中に出てきた子どもたち以外に、当時の小学校・中学校の先生、多くの大人たち、勿論彼女の両親や姉

妹が大きなかかわりを持っていたことだろうと思うのです。

長い昔語りになつてしまいました。私がこの本を書きたいという思いは、このような無数の物語のなかで三十年以上を生きてきた、この私の中に少しずつ蓄積されてきた”先生”という仕事についての思いを、このまま私の中に抱え込んで老いてゆくことに、何かたまらない思いを感じていることに由来しています。これは苦しすぎる。今の先生、これからの先生、そして世の父や母たちに伝えたいものがここにあるのだ、そういう思いです。いわば老いの繰言であり、大変な押し付けだろうと思うのですが、この本を手にとっていただいたあなたに伝えたいと思います。

